



鎌田 宏

一般社団法人東北経済連合会 副会長

商工会議所と渋沢栄一

東京商工会議所初代会頭、渋沢栄一を主人公にした大河ドラマ「青天を衝け」が放映中である。

ご承知の通り、渋沢は生涯を通じて約500の企業の設立・育成や、約600の社会公共事業に尽力し、近代日本経済の礎を築いた指導者の一人である。「資本主義の父」と称されるまでに至った人生の歩みを私も毎週楽しみにしながら見ている。

そうした数々の功績の中には、宮城県商工会議所連合会の事務局で、私が会頭を務めている仙台商工会議所との関係性も垣間見える。仙台商工会議所の前身となる宮城商法会議所が創立したのは明治13年(1878)のこと。渋沢の意により派遣され、仙台実業界の牽引役となっていた遠藤敬止(第七十七国立銀行2代・4代頭取)と尾高惇忠(第一国立銀行仙台支店長)の尽力によるものである。遠藤は大蔵省の銀行事務講習所に講師として出仕する中で、その高い能力を渋沢に見出され、その右腕として力を発揮。尾高は渋沢の義兄で学問の師でもあり、渋沢の生涯の節々でその活動を支えるなど、共に渋沢と強い結びつきを持つ人物だ。

その後、仙台を中心に、宮城県、東北六県の経済的發展を目指して、明治24年(1891)に仙台商工会議所(当時は仙台商業会議所)が設立された際には、遠藤と尾高は副会頭に就任し、さらに遠藤は二代目の会頭にもなっている。

渋沢は、自身が民部・大蔵省に任官するきっかけを作った、民部卿兼大蔵卿の宇和島藩8代藩主伊達宗城(初代藩主秀宗は伊達政宗の長男)を通じて、東北の振興に強い関心を抱くようになった。その後、第一国立銀行の大株主であった小野組の倒産により、その傘下にあった福島県二本松市の製糸工場が整理対象になったことから東北振興への思いを強めていく。そうして関係する人々とともに東北の発展に深く関わっていったわけだが、その中で渋沢は、「東北振興においては、東北人自らの奮起努力が必要であることは言うまでもなく、奮然決起、不撓不屈の精神であらゆる活動をしなければ、どんなに中央の有力者が助力しても、到底満足の得られる効果は挙げられない」と語っている。

東北の人々は、東日本大震災という未曾有の災害から決して目を逸らすことなく、多くの皆様方にご支援をいただきながら、着実に復興へと歩みを進めてきた。震災から10年という節目を迎え、渋沢栄一をはじめとする多くの先人たちの東北振興への強い思いを再認識しながら、今後起こりうるどのような難局も「青天を衝く」がごとく、必ず乗り越えていくと決意を新たにしているところである。

(宮城県商工会議所連合会 会長・かまた ひろし)